

女子高におけるジェンダー・サブカルチャー

——女性性への適応と反抗の過程——

東京大学教育社会学研究室 宮崎 あゆみ

Gendered Subcultures within a Girls' High School

——A Process of Accommodation and Resistance to Femininity——

Ayumi MIYAZAKI

This research examines student subcultures with a gender perspective, using the ethnographic approach on a girls' high school. In this paper I call subcultures studied with gender frameworks in mind "gendered subcultures". In the first part, I briefly review traditional subculture studies and school organization studies which have overlooked such aspects as gender roles and femininity and masculinity. I also review the debate about single sex education v.s. co-education. This debate focuses on sexism within schools and subcultures related to girls' academic achievement. In contrast, this research focuses on femininity and gender roles as aspects of gendered subcultures.

In the second part, the research, focusing on femininity of girls, shows that, within a girls' high school, there are gendered subcultures free from femininity, peculiar to a single sex school, but that they both accommodate and resist femininity out of school. It is confirmed that femininity is not fixed but changing.

目次

- I. ジェンダー・サブカルチャー研究
 - A. 従来のサブカルチャー研究とジェンダーの視点
 - B. 共学・別学とジェンダー・サブカルチャー
- II. 事例研究
 - A. 研究の対象と方法
 - B. K女子校におけるジェンダー・サブカルチャーの側面についての概略
 - C. 「女子校ののり」——女性性を脱ぎ捨てたサブカルチャー
 - D. 女性性への適応と反抗の過程
- III. まとめと今後の課題

本稿の目的は、ジェンダーの視点で教育社会学におけるサブカルチャー研究をとらえなおすことを検討し、実際に女子校という場において展開するジェンダー・サブカルチャーを考察することである。考察は、エスノグラフィックな調査の一部を通じて行われ、女子生徒たちの女性性への「適応」と「反抗」の過程に焦点が当てられる。

I. ジェンダー・サブカルチャー研究

A. 従来のサブカルチャー研究とジェンダーの視点
学校・学級内で、生徒たちは特定の集団に準拠して、生徒独自の価値規範を形成し行動様式をみ出していく。「サブカルチャー」と呼ばれるのは、これらの価値規範や行動様式である。サブカルチャーは、特定の生徒集団内のあるいは集団どうしの相互交渉を通じて、そして上位学校システムとの関係において形成され、分化していく。

こういったサブカルチャーを記述・説明するものとして、従来のサブカルチャー研究が焦点を当ててきたのは、「アチーブメント」や「階級」の側面であった。日本の生徒文化研究は、1970年代に盛んに行われ、高校内部で生徒文化が「遊び下位文化」「反学校文化」などに分化していることを統計的な方法によって明らかにし¹⁾、生徒文化の分化を説明する際の指標として主に学業成績や教育上の進路志望といったアカデミックアチーブメントに注目した²⁾。アメリカのサブカルチャー研究において

は、アカデミックアチーブメントに加えて生徒活動や遊びにおけるアチーブメントが重視され³⁾、イギリスの研究では階級的背景が関心を集めた。これらの研究は、日本の研究と異なり、文化を実体化してとらえることを可能にするエスノグラフィックな手法を取り入れたことが特徴的である⁴⁾。

しかしながら、教育社会学におけるサブカルチャー研究において、文化のダイナミクスを考察する際に、「アチーブメント」や「階級」ではなく、「ジェンダー」の視点を取り入れたものは行われてこなかった。従来の研究は男子生徒を主要な対象にして行われるか、生徒文化を両性に共通の中性的なもののみならずジェンダーの視点を見過ごしてきた。英米のサブカルチャー研究では、その膨大な蓄積にもかかわらず、そもそも女子生徒を対象にしたものが驚くほど少ないという指摘が多くなされている⁵⁾。日本では両性が対象となることが多かったが、性の要因は注目されてこなかった。それが注目される場合でも、女子生徒と男子生徒の文化の差異を記述するにとどまっているものが少なくない。サブカルチャー研究に必要とされるのは、性差研究ではない。必要なのは、文化のダイナミクスの考察に、性役割や女性性男性性⁶⁾といったジェンダーの視点を取り入れる研究であり、筆者はそういった研究をジェンダー・サブカルチャー研究と呼ぶことにする。

ジェンダー・サブカルチャー研究が行われてこなかったということは、学校組織に注目した研究にもあてはまっている。学校組織に体系的かつ実証的にアプローチした King (1973) の研究⁷⁾ を例に挙げよう。彼は、学校組織において、学ぶ科目、特別活動など生活のあらゆる面で性別特化 (sex specialization) が強固に行われていること、一方、生徒の関与には性差が見られることを明らかにしている。しかしながら、King は性別特化という組織構造と関与の性差には関係がないという結論を出している。これは、以下の理由による。つまり、学校組織における性別特化も、生徒の関与も、伝統的な性役割への社会的期待という同じところから生じているのであるが、その両者が直接関係をもつわけではないからである。

しかしながら、ジェンダー・サブカルチャーの視点から見れば、King の出した結論には疑問が生じる。それは、生徒文化の内容に関してである。King が扱っているのは、教師とうまくやっているか、学校での勉強や行事を楽しんでいるか、規則を守っているか、などの学校への関与に関するものが限られている。しかし、性役割や女性性男性性というサブカルチャーの側面を見るこ

とによって、King が出した結論は異なったものになる可能性がある。また、King は主に共学における生徒の関与の「性差」のみを扱い、いわば学校ぐるみの性別特化である共学と別学に関しても、生徒の関与に差が出ることを示唆するにとどまっている。しかし、共学と別学におけるサブカルチャーは、とくに、生徒の関与だけではなく、ジェンダーの側面に光を当てることでより明らかになると考えられる。ここに、ジェンダーの視点によらえなおしによって、ジェンダー・サブカルチャーの新しいテーマの一つが浮かび上がる。それは、共学・別学という学校組織を場にして繰り広げられるジェンダー・サブカルチャーである。

B. 共学・別学とジェンダー・サブカルチャー

共学と別学に関する研究には、女子大の意義を問うという文脈で行われたものがある⁸⁾。しかし、中等教育段階で行われたものは日本ではあまり見られない。わずかに特性教育として女子校が有効かどうかというジェンダーの視点とは異なった視点で行われた研究があるのみである⁹⁾。それに対し、英米では、注目すべきものとして1970年代に行われた共学女子校論争がある。

共学女子校論争の争点は、共学と女子校ではどちらが女子の教育に平等をもたらすかということである¹⁰⁾。共学 (co-education) は、20世紀前半に、性による分け隔てのない教育を志向して、ただ経済的な理由等で両性をいっしょにした mixed schooling とは区別されて定義された。共学校は最初は論争をよんだが、1944年以降、別学校 (single-sex school) が減少していき、共学校は両性における機会の平等を与えると考えられたことから、別学校と共学校との論争の余地はないといわれてきた。

ところが、1970年代に入って、多くの研究が共学校の問題性を指摘しはじめた。これらの研究は、中等教育レベルの共学校は、科目選択や、教師による生徒の性による差別的処遇など、性による教育の平等をはばむ点を有することを明らかにし、共学が疑いなく支持されていた状況を覆して再び共学女子校論争の口火を切った。別学校を支持する報告によれば、別学校の方が、女子が男性領域といわれてきた数学や科学を選択する率、あるいは男子が女性領域といわれてきた芸術科目などを選択する率が高い。また、別学校では、男子のかたわらで学ぶことがないので、とくに女子に弱いとされる数学や科学で自信をつけることができる。そして、共学校では女子は学習の面でも人間関係の面でも従属的な立場におかれることが自己評価を下げがちだが、女子校ではそのような状況から免れることができることも挙げられている¹¹⁾。

この論争には決着がついていないが、その中では、共学と女子校という学校組織が生徒に与える影響についての研究が多く出された。この論争は、ジェンダー・サブカルチャーの文脈に置き換えれば、Kingが十分に扱ってこなかった学校組織におけるセクシズムの違いと、それに影響を受ける教育達成に関係する女子生徒のサブカルチャーを主に扱ってきたと理解することができる。それに対し、本稿では女子校において繰り広げられるジェンダー・サブカルチャーに重点を置き、教育達成に限らず、性役割や女性性男性性に関わるサブカルチャーへ範囲を広げる。また、エスノグラフィックな調査の一部を用いることで、女子生徒たち自身の女性性への「適応」と「反抗」を描き、ジェンダー・サブカルチャーのダイナミズムの一端を示したい。

II. 事例研究

A. 研究の対象と方法

調査の概要は以下のとおりである。

対象：大都市圏にある私立K女子高校。進路別に分かれるコース制を取る。

調査者の立場：国語の産休講師。第3学年Aコース（主に就職・専門学校希望）の古典および就職対策作文漢字担当。

観察期間：1991年4月から9月の半年間。

方法：仲よしグループインタビュー（49グループ131名）および学校のさまざまな場面における参与観察。観察期間の最後に行った仲よしグループインタビューは、第3学年Aコース4クラス（選択授業の小クラス1を含む）、Tコース（主に四年制大学希望）1クラスを対象にした。ふだんいつもいっしょにいるグループで協力してもらい、インタビュー時間は1グループ45分（1人の場合）から5時間に及んだ。インタビューの場所は、学校の空き教室、部室、喫茶店、カラオケボックス、予備校、生徒宅など多岐に及んでいる。インタビューでは、女子校、学校生活、規則・制服、教師、友達・グループ・コース、学校外での生活、異性関係、進路・将来（性役割）というサブカルチャー全般にわたる項目を設定し、自由に話してもらった。インタビュー対象クラスの生徒で調査者の時間的な理由で行えなかった分はアンケートで補った。なお、一部の教師に対してもインタビューおよびアンケートを行った。

B. K女子校におけるジェンダー・サブカルチャーの側面についての概略

本稿は、以上のような要領で行われたエスノグラフィックな調査の中でも、インタビューにおいて生徒たち自身が女子校のサブカルチャーについて語った部分¹²⁾を中心に扱う。女子校についての話題は女子校について尋ねた項目だけではなくインタビューのさまざまな項目を通して顔を出した。生徒たちは「女子校ののり」「女子校ならでは」といった言葉で女子校独特のサブカルチャーに関して語った。彼女たちの語る「女子校ののり」は、以下に例¹³⁾を挙げるように、彼女たちなりの女性性と結びつけられていた。

- ユカリ「中学のときってやっぱりみんなでさー女子校行くとさーとか言って、女じゃなくなるよーっていう話題挙がらなかった？」—29(A)
- ちぐさ「どういう基準を女らしいっていうのがより子「女子校来るともっと何かそれがさーわからなくなっちゃう」—46 (ABT)

本稿では、このように彼女たちが女性性と結びつけて語った女子校独自のサブカルチャーから浮かび上がる、彼女たちの女性性への「適応」と「反抗」の過程を描いていく。

「適応」と「反抗」を扱うことには、ジェンダー研究においても次のような意義がある。ジェンダー研究において、多くの研究者は家庭やマスメディア、あるいは学校においてもステレオタイプのな性役割期待があることを実証してきた。しかしながら、ステレオタイプのな性役割のメッセージは、必ずしもストレートに「成功をおさめる」わけではない。メッセージを送られるもう一方の側には行為者がおり、「適応」と「反抗」を繰り返しているのである。この女性の社会化を複雑にしている「適応」と「反抗」のプロセスに焦点をあてることは重要である。

Anyon¹⁴⁾は、女性の女性性への「適応」と「反抗」に注目し、その複雑さを示す幾つかの例を上げている。例えば、同じ個人でも公的な行動と私的な考えや信念には様々な「適応」と「反抗」の不一致が起こる。また、その不一致のありかたは階級によっても異なっている。

Anyonの例は断片的なものにとどまっている。しかしながら、Anyonが示した「適応」と「反抗」のプロセスは、女子校をとりあげることでより顕著なかたちで浮かび上がる。女子校は男子がいないという状況をつくる実験室のようなものである。いわば女子校は異なったジェンダー環境に生徒を置く装置である。ここにおけるエスノグラフィーで明らかになったのは、彼女たちが実験室

の中で、女性性をあたかも脱ぎ捨てるかのように切り放しているということである。しかし、このような彼女たちの女性性からの乖離あるいは「反抗」は、必ずしも固定的ではなく、場に応じて「適応」に転じているのである。

このような「適応」と「反抗」の過程は、前述のようにサブカルチャーの中でも今まで見逃されてきた、性役割や女性性にかかわるジェンダー・サブカルチャーの部分を明らかにしてくれる。以下に、彼女たちがインタビューで語った「女子校ののり」および観察のデータを用いて、まず女子校という場において展開するジェンダー・サブカルチャーを分析しよう。

C. 「女子校ののり」——女性性を脱ぎ捨てたサブカルチャー

1. 女性性からの解放

a. 「気楽」——行動と解放感

彼女たちの中で「女子校ののり」として最もよく話題に上ったのは、「女子校は気楽」ということであった。「とにかく楽」「気が抜ける」「気をつかわなくていい」といった言葉が実に49グループ中33グループから飛び出し、話題となった。例を挙げよう。

- あき子「女子校もよくない？女だけでワーワーできる。それになんか授業中も早弁とかお菓子食いーの」

ユカリ「男がいるとできないよね。お菓子食いーの。ちょっとはしたないけどなんでもできる。それがお得なのよ」 —29(A)

- もゆる「女子校よかった。選んでよかった女子校。授業中にね、おなか痛くてもトイレにいける。(笑)」

かほ子「いえる、それ。あんまりまわりの目気にしなくていいからね」

ミヤコ「共学だったら言われるよね」

もゆる「異性がないっていうのはいいよね。先生とかじゃなくて同年代のね」

ミヤコ「すごしやすい。気楽だよ。変に気つかうことない」 —44(A)

- ゆり子「でも慣れれば気楽だし」

AM「気楽っていうと？」

ゆり子「なんでもできるっていうか、授業中髪の毛とか気にならないし、教室とか汚くても気にならないし」 —16(T)

各グループからは、こういった「気楽」の示す具体的な事柄が多くでた。「早弁できる」「着替えが楽」「授業中

のトイレ」「ふだんの格好（セーラー服の下にジャージをはく等）」「授業中寝る」「鼻をかめる」「教室で髪の毛をとかせる」「髪がはねていてもいい」「姿勢に気をつけなくていい」「足がひらける」「暑いときスカートをばたばたはたける」「生理のとき楽」等々。これらの具体的な事柄は多く観察されたことでもあった。しかし、彼女たちの話す事柄はこういった具体的な事柄にとどまらない。こういった事柄とセットになって出てくるのは、「何でも言えるし、何でもやれる」「好きなことができる」「本音だからいい」「自然」「自由にできる」といった「解放感」を表す言葉であった。少数派ではあるがこれらのことを「だらしくなる」というように否定的にとらえるグループもあることは付け加えなければならない。しかし、とらえられ方が肯定的であれ否定的であれ、こういった事柄のセットは、彼女たちが自分なりに「こうしなければならない」と考えている女性性から解放されていることを示している。

b. 「OPEN」な話

「気楽」の一要素としてとくに注目すべきは、女子校は話の内容が「OPEN」であるといわれたことである。まず、例を挙げよう。

- ひかり「女子校だとやったやらないの話でね」
いく子「おっと、ひかるちゃん、テープに入ってんだよ(笑)」

とも子「共学もそういうのしゃべるけどこそそって。でも男がいるとOPENになれないのかな。」

めぐみ「OPENじゃないんだよね。」 —10(A)

- さと子「こんなこと共学じゃできないよねっていうこといっぱいあるよね。(中略)なんかあってほんとだったら気にするかなーって思うようなことでも、ま、どうせ女子校だし、んーって感じで平気になっちゃったり」

まき子「露骨にしゃべるよね」

AM「何？」

まき子「恥ずかしー！(笑)」

さと子「おなかの調子が悪かったら『うんこしたい』とか、気持ち悪かったら『ゲロが出そう』とか」

まき子「気持ち悪いこと平気でしゃべったり」

—27(T)

このように、「露骨に話す」「Hい話で盛り上げる」「男がいるとできない話題で盛り上がる」といった話題が出たグループは12グループあった。彼女たちは共学では「OPEN」になれないという。しかし、女子校では「露骨

な話し方」「性にまつわる話題」などが男子に占有されるといふ状態はない。

このような女子校の「OPEN」さは友達の間だけのことではない。それは、授業風景にも影響している。授業の中で女子生徒が性にまつわる話題に対しておおっぴらに笑ったり、自らが話題の提示者になることすらも観察された。このような場合の教室のインタラクションにおける女子生徒の役割は、共学とは異なったものであることが予想される。Stanley (1986)¹⁵⁾ が総合制中等学校で行った調査では、女子生徒が「静か」であることが観察されたという。「静かにすること」は彼女たちが共学校でたちまわるストラテジーであった。女子校においてはこのようなストラテジーは必要ないと考えられる。

3. 「女だけで楽しい」——男子の目によって分断されない友達関係

さて、このように「気楽」で「OPEN」な女子校の中で、女子どうしの友達関係も共学とは違ったものになるという感想も多くなる。「女だけで盛り上がる」「いろんな話ができる」「女の友達が増える」「女だけで楽しむことを覚えた」などといった、「女子校は女だけで楽しい」という話題が出たグループは、17グループにのぼっている。例をいくつか挙げよう。

- ありさ「男の子といるより友達とも仲よくできる」
—48(A)
- そのみ「女子校来てみると女子校来てよかったー！
男いなくても女だけで充分盛り上がる。話とかまわりに男がいるとできないもんね」
ノブエ「でも結構深いとこまでおもしろいよね。こう掘り下げてね（手で掘るまねをしながら）。どんどん掘ってくよね。」
—37(A)
- クニコ「男と女しかいない世界で女だけじゃん。そういうのってないじゃん、他に。だからそれなりのよさがあるの。とくに理由なくてもみんなといるとき、あ、よかったな、みたいな。
（中略）やっぱりみんな気どんないじゃん。
女どうしだからね」
—33(A)

これらの「女子校は女だけで楽しい」という例では、「共学だと女だけで楽しくなれない」という意見が目だつ。どうして彼女たちは共学に比べて女子校の同性の友達関係を評価しているのか。このことは、彼女たちが女子校経験を自分達自身がした中学時代の共学経験や共学に通う友達の経験と比較して語っている部分が明らかにしている。それは、一言で言えば、男子の目によって、あるいは男子の目を気にする女子自身によって女子が分断されることが女子校ではないからである。

共学と比べて女子校が「女だけで楽しい」のは第一に、「男の前と女の前で態度が違う女がいない」から「本音になっていい」ということと関係している。「男の前と女の前で態度が違う女はいやだ」という意見は9グループで出ている。例を一つだけ挙げよう。これに関する意見は非常に似通っており、一例で代表させることができる。

- みお子「中学のときもいたじゃん。女の前と男の前と」
たつ美「態度が違う人でしょ」
みお子「男の前ではすっごい気のきくかわいい」
こと子「かわいい少女を」
みお子「かわいい少女を演じてるくせに、こっちくるとわがままで」
たつ美・こと子「そうそうそうそう」
みお子「実は女子にきらわれてる。そういうの出てくるよね。どうしてもでてくるよね。どうしても男のほうに行ってしまうっていう」

—47(T)

彼女たちは「男の前と女の前で態度が違う女」を嫌っており、「そういう女が男に気にいられる」のを納得がいかないと思っている。女子校の中は、そのような「態度の違い」とは無縁な世界であり、その中で女子どうしの友達関係がくり広げられる。

女子校が「女だけで楽しい」というのは、第二に、「共学の男女関係のわずらわしさから解放される」ということと関係している。「共学の男女関係のわずらわしさ」とは、「男女がきっぱりわかれて」「男の子とすぐ噂になる」というように、クラスメイトである男女が「つきあう」という軸ではかられる「めんどうくささ」である。それは、その結果女子どうしが対立してしまう状況でもある。女子校は「共学の男女関係のわずらわしさから解放される」という意見は8グループで話題になっている。例は以下の通りである。

- ちなみ「共学幼くない？」（中略）
キリコ「まだ中学の名残が残ってるのよ。男のこと噂があるとすんでしょ。ちょっとしゃべったりするじゃん、そうすると何あの子とかって言われんだってね。私聞いてバカみたいって言っちゃった。身近な人好きになっちゃったり、つい噂になっちゃったり」
—39(A)

以上のように、女子校においては、異性の生徒がいる相互交渉の中で、女性性に適応して態度を変える同性を見たり、「つきあう」という軸で図られたりする「わずらわしさ」から解放された友達関係が展開する。

4. 女子がやっていた役割を担わない、男子がやっていた役割を担う

「女子校ののり」は、a「女子がやっていた役割をになわない（おとなしくしなくてもよい等）」、あるいは、b「男子がやっていた役割を担う（はっきりものが言える、リーダーシップが取れる等）」ものであることが話題に出たグループは15グループあった。例を挙げよう。

〈aの例〉

- はるか「とにかく当てられたときに答えられないの恥ずかしいし。自分を表に出せない」

AM「自分を表に出せない？」

はるか「かわいくしなくちゃいけないっていうか、自分を作る。ねこをかぶらなくちゃいけない」(中略)

あい子「共学はおもしろいっていうイメージ強かったから。でも今は女子校にきてよかった。何でもできるし、気をつかわなくていい」

AM「共学だと気をつかわないとだめかな」

よう子「騒ぎたいのにうるさい女の子だって思われちゃうからできなかったり」 — 9(A)

- ふじか「しゃべってるときに女の子だと、言うときも（男の子に）遠回しに言わなきゃだね」(中略)

えつ子「休み時間も（共学は）静か」

ふじか「自分が出せないんだよね。共学だとそこそっとしゃべってる感じで。男の子の目を気にして。女子校はワー！って感じ。(中略)共学はやだ。みんな普通にしなくちゃいけない。女の子はそれなりに見てるだけっていう」 — 31(T)

- より子「先生たちが来ても、男子がいませんよね。だから、先生たちとみんな本音が言えるんですよ。けっこう女の子って、まわりに男の子がいるとしゃべらなくなるでしょ。でも女子校だとベラベラベラベラ」 — 46 (ABT)

〈bの例〉

- けい子「実験とかも男まかせになっちゃうのを自分でできるとか。発言も（男子がいると）できなくなる。いまなら『わかんない』とかって言えるけど、言えなくなっちゃう気がする」(中略)

AM「男子がいるとそれができないってこと？」

けい子「思ったことが言える」

AM「男子がいるとやっちゃいけないって思う？」

けい子「なんかわかんないけど今とは違うと思う」 — 6(T)

- サヤカ「男子いるとできないことってありますよね。気をつかってしまったり…」

AM「女子だけだとできる？」

サヤカ「できるってわけじゃないんですけど、男子に気をつかわずに何でもできるっていうんですか。男子がやんなきゃいけない仕事でも全部女子がやんなきゃいけないってことになりすよね。今まで男子がうけもったことでも男子がいなくてもここまでできるとか」

— 26(A)

このように、彼女たちの口からは、「おとなしくしないでいい」「はっきりものが言える」「先頭に立てる」などの話題が出ている。bの最初の例で出たように、「発言できる」状況であるということに関しては実際の授業観察および筆者の授業でも確かめることができた。この種の意見は進学クラス、あるいは勉強グループと呼ばれる生徒たち¹⁶⁾とくに顕著であると言える。「間違えても思い切って自発的に発言する」という状況に関して、教師たちも「女子校特有の現象ですね」とコメントしている。このように、女子校では共学において行われていた性役割からも解放されたサブカルチャーが展開している。

以上の分析から、女子だけが隔離された実験室のような女子校という場で、生徒たちが女性性を脱ぎ捨てた、あるいは女性性に「反抗」を企てるサブカルチャーを形成していることが分かる。生徒たちがいうところの女性性から離れた状況、つまりインタビューから言葉を借りれば「女じゃなくなる」状況が、女子校独自のサブカルチャーである。こういった状況で、彼女たちは教師たちに「荒くれども」といった一般的に男性に付されるような言葉で形容されることにもなっているのである。

D. 女性性への「適応」と「反抗」の過程

女子校という場では以上のように女性性から距離をおいた文化が繰り広げられている。このような女子校独自のサブカルチャーは、確かに前述の女子校共学論争の文脈から言えば、伝統的な性役割からの解放の役割を果すということもできる¹⁷⁾。しかし、ここで考えてみなければならぬのは「女子校ののり」が語られる際に、随所に「共学ではできない」「男の前ではできない」と述べられていることである。彼女たちの言葉の端々に現れるこのようなことは、彼女たちの女性性への距離の取り方が一様ではないことを示している。つまりこのことは、彼

女たちがあるときは女性性に「適応」し、あるときはそれに「反抗」していることを示しているのではないだろうか。

インタビューの中で、彼女たちが実際に適応したり反抗したりすることを明らかにした部分に今度は注目してみよう。女性性への態度が一枚岩ではないことを示すものとしてまず挙げられるのは、「女子校の内と外では自分の態度が変わる（自分の態度が実際変わる、もしくは自分は共学にいったら態度を変える）」ということを経験したグループが多かったことである。彼女たちの半数以上は、コンパ、紹介¹⁸⁾、パーティー、バイト、地元など学校の外で男子と接する機会をもっている。女子校だけが彼女たちの世界ではない。彼女たちが「男の前と女の前とで態度を変える女はいや」という意見を出したことは前述した。しかし、そういう意見が挙がる一方で、彼女たちは女子校の外に出たとき自分で態度を変えてしまうことを意識している。このような話題を出したグループは、16グループにのぼった。例を挙げよう。

- まき子「(コンパでは) なんか気どっちゃうよね」
(中略)

AM「気どっちゃうってどういうの？」

さと子「あ、先生気になってるー！(笑)」

まき子「うまく表現できないんだけど、すかしちゃう」

AM「すかしちゃうってどういうの？(笑)」

まき子「自分の性格を全部出さないっていう。ムリしちゃうっていうか」

さと子「あーそれはあった。なんで私がほんとこんなことしなきゃいけないんだろうって思うことあった」

AM「変わっちゃう？」

まき子「よくわかんないんだけど、よくみてもらえようとして…」

AM「すかしちゃうわけ？(笑)」

まき子「だから、本当の自分じゃないんだよね。相手によく見てもらいたいっていうか。あの子いいなって思われたいんだよね」

さと子「外見とか」

まき子「なんか態度とかさ」

さと子「ちょっとした気遣い？心遣いとか。ちょっとしたすきにすぐハンカチ出してあげたり。
(笑) そのあとそのハンカチがアイロンかかってたりするっていい子だなんて思われそうじゃない？」
—27(T)

- ひろ子「男の子の笑いとお女の子の笑いは違う。

ちょっと待ってね。だんだん思い出してくるから。高校生になると、男の子が冗談言ってる、こっちはちょっとした冗談で返すっていう。女の子だと冗談言ってる冗談言ってる冗談言ってるって(筆者と彼女との間を交互にすばやく指さしながら) こんな感じなの。中学のときはこういう感じじゃなくて、同じって感じだったじゃない？今は全然差がある。男の子が冗談言ってくると、こっちがちょっと言うともういろいろしゃべりだすじゃん。で、なんかしゃべらせておいて、こっちでちょっと動いたり、うんとかすんとかなんとかおもしろいこと言ったり」
—25(T)

「男の前と女の前で態度を変える女はいや」と彼女たちが言っていたことは前述した。女子校の中では異性からの目によって「女らしい」態度に変える必要はない。しかし、このような場の外に出て「よく見てもらいたい」と思うとき、「態度を変える女がなぜかもてる」ことを知っている彼女たちが態度を変えて女性性に適応することは、彼女たちにとっては合理的な、あるいは取らざるを得ない戦略である。どのように態度を変えるかというところに、「アイロンのかかったハンカチ」や「男子にしゃべらせておいて聞き役になる」といった彼女たちなりの「女の子はこうすればよくみてもらえる」という女性性が出ていることは上の例でも明らかである。

また、「自分の態度を変える」ことが意識されて話題に出された例ではなくても、「女子校ののりは外に持ち出さない」ことを意識していることが言葉の端々に出ることも多い。そのような例を挙げよう。

- たい子「(共学は) 二重人格になるから。でも(女子校は) 性格が派手になっちゃった。下品になっちゃったっていうか。それを男の前で忘れちゃうの」
—21(A)
- あつ子「えーでもさいったん女子校入っちゃうとき外でさーけっこうポロッとでちゃう」
るみ子「まわりが女子校だとなんの疑いももたないけどさ」
—18(T)

確かに女子校という場においては彼女たちは女性性から距離を置き、あるいは女性性に「反抗」を加えてもいた。しかし、今見てきたように、女子校の内での女性性への「反抗」は女子校の外での女性性への「適応」と裏腹なのである。

女子校の外では、女子校の内とは違った論理が働いていることを示すこととして、彼女たちから「共学の男女と女子校と男子校の男女とのつきあいは違う」という話

題が多く出されたということがある。彼女たちの言うことを要約すると、「共学の男女は自然に友達みたいにつきあえるが、男子校と女子校だとはじめから『彼氏』『彼女』の候補として見ることになる」というものである。このような指摘は7グループから出された。彼女たちが女子校では「共学の男女関係のわずらわしさ」から解放されるという話題を出していたことは前述した。「共学の男女関係のわずらわしさ」とは、「男女がきっぱりわかれて」「男の子とすぐ噂になる」というように、クラスメイトである男女がすぐに「つきあう」という軸ではかれる「めんどくささ」であった。しかしながら、女子校の中でその「わずらわしさ」から解放された彼女たちは、皮肉なことに、女子校の外に出たときに男子校対女子校という接し方の中で共学よりも強調された形での「わずらわしさ」と出会うことになるのである。

彼女たちの女性性への距離の取り方の揺らぎを示すものとして、最後に挙げられるのは、「女子校の外に出たらどうなるだろう」「女子大に行きたい」など女子校という場の外側に出る不安や外側への違和感を話題にしたグループがあったことである。このことは、彼女たちが女子校の外と内での論理の違いを意識し、外での論理に合わせることへの不安を表明していると考えられる。この点は、女子校の外にあまり世界をもたないものの中から出されたものである。こういう話題が出たグループは5グループあった。例を見てみよう。

- さつき「面と向かってしゃべれないもん。そんな男の子と。しゃべれるかもしれないけど、給食のときとか気つかっちゃうし、体育んときとか、どうしようかと思っちゃうし。今女子校だから、共学行ってる子とか全然わかんない！どうやって生活してるか。やだな。(中略)だから、女子大行きたいし」 —30(A)

女子校において彼女たちが女性性から距離を置いているということは、彼女たちが外の世界での、あるいは将来にわたる女性性への「反抗」のかたちを女子校の中で見いだしているということを意味するわけではないのである。

以上のように、彼女たちの女性性への対応は一枚岩ではない。問題は女子校という場だけが彼女たちの世界ではないというところに集まる。彼女たちは、「女子校の内と外で自分が態度を変える」「女子校ののりは外に持ち出さない」、あるいは「女子校の外に出たときの不安または違和感を感じる」ということを語った。確かに女子校においては、彼女たちは女性性を脱ぎ捨てたサブカルチャーを展開していた。しかし、彼女たちの行動は女

子校の外では「適応」に転じている。このことは、彼女たちが女性性を場によって演じ分けている、あるいは演じ分けなければならないと認識しているということを示している。彼女たちの「適応」と「反抗」は、女性性が従来のジェンダー研究で前提とされがちであったように、必ずしも性別役割のメッセージによって一方的に受容されるものではなく、行為者が演じ分けるという揺らぎの部分を含み込むということを示しているのである。

Ⅲ. まとめと今後の課題

本稿では、ジェンダーの視点で従来のサブカルチャー研究をとらえなおすことを述べ、実際にエスノグラフィックな調査の一部を用いて女子校を場にジェンダー・サブカルチャー研究の一つの試みを提示した。女子生徒たちは、女子校独自のサブカルチャーを自分たちの女性性とのかかわりを意識しながら語った。そのことから、女子校内部では、女性性を脱ぎ捨てたサブカルチャーが展開していることが浮かび上がった。しかしながら、インタビューを注意深く見れば、彼女たちの女性性からの距離の取り方が一枚岩ではないことが分かる。彼女たちの女性性は、固定しているというよりも、場によって演じ分ける揺らぎをもつものであった。このことは、女子だけが隔離された実験室のような女子校を見ることで明らかになったことである。しかし、ジェンダー・サブカルチャーは共学や男子校を舞台にしても繰り広げられるものである。様々な学校組織を場にしたジェンダー・サブカルチャーの研究が必要であると言える。

また、本稿ではジェンダー・サブカルチャーの中でも女子生徒の女性性へのかかわりを中心に扱った。しかし、サブカルチャーの様々な部分にジェンダー・サブカルチャーのテーマが残されている。ジェンダーの視点で見た教師-生徒関係、生徒間のジェンダー・サブカルチャーの多様性など、やるべきことは多い。日本において教育におけるジェンダーの実証研究はまだその緒に就いたばかりである。

注・参考文献

- 1) 藤田英典, 潮木守一, 滝充 1978, 「中学校文化の構造的分析」『名古屋大学教育学部紀要』第27巻, 171-216頁
- 耳塚寛明, 荻谷剛彦, 樋田大二郎 1981, 「高等学校における学習活動の組織と生徒の進路意識」『東京大学教育学部紀要』第21巻第29号, 第4分冊, 23-49頁
- 清水義弘 1978, 「地域類型別にみた高等学校の適正規模に関する総合的研究」『東京大学教育学部紀要』第17巻, 1-46頁

- 2) 耳塚寛明 1980, 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集, 東洋館出版社, 111-122頁
- 3) Coleman. J.S. 1961, *The Adolescent Society*, The Free Press
- 4) Hargreaves.D.H. 1967, *Social Relations in a Secondary School*, RKP
Lacy. C. 1970, *Hightown Grammar*, Manchester University Press
Willis. P. 1977, 熊沢誠, 山田潤訳, 1985 『ハマータウンの野郎ども』, 筑摩書房
- 5) Brake. M. 1980, "The Invisible Girl. The Culture of Femininity versus masculinism", in *The Sociology of Youth Culture and Youth*, RKP, pp.137-148
Davies. L. 1983, "Gender, Resistance and Power", in *Gender, Class and Education*, The Farmer Press, pp.39-52
Meyenn. R. 1980, "School Girls' Peer Group", in *Pupil Strategies*, ed. by Woods. P, RKP, pp.108-142
- 6) 本稿では, 生徒自身によって語られる「女性性」をもとに書かれるが, それは社会的に構成された相対的な関係概念としての女性性である。
- 7) King. R 1973, *School Organization and Pupil Involvement*, London, Routledge
- 8) 天野正子編著 1986, 『女子高等教育の座標』, 垣内出版
- 9) 左光昭二 1986, 「女子別学の教育実践に関する調査研究」『日本私学研究所紀要』 第22号, 92-95頁
- 10) Deem. R ed.1984, *Co-Education Reconsidered*, Open University Press
- 11) S. C. S. E. G. "The realities of mixed schooling" in Deem, op. cit., pp57-74
Smith. S. "Single-sex setting" in Deem, op. cit., pp.75-88
- 12) 彼女たちは必ずしも女子校を希望して来たわけではない。インタビュー, アンケート併せて213名中最初共学を希望していたものは112名(52.6%), 女子校希望は56名(26.2%), 別に意識していないのが32名(15.0%)。女子校は偏差値などの条件を考え合わせる道筋で選択の余地なくぶつかるものとして語られていた。しかし, 必ずしも希望して来たわけではなかった女子校にすぐに適応したという者が多数派であった。ただし, 少数派ながら, 女子校に適応できない生徒もいたことは付け加えなければならぬ。そういった生徒からは, 「女子校はいじめがある」「女のいやな面がみえる」など女子校のサブカルチャーに対する否定的な見方が出された。
- 13) 以下インタビューの抜粋には, インタビューを行った順のグループの番号を行末に付す。括弧内はコースを示す。Aコース(就職・専門学校希望コース), Tコース(四年制大学希望コース)の他に仲良しグループインタビューにはBコース(短期大学希望コース)の生徒も含まれている。名前はすべて仮名である(AMは筆者)。なお, 文章中に多くの引用を「」で示した。
- 14) Anyon. J. 1983, "Intersections of Gender and Class : Accommodation and Affluent Females to Contradictory Sex Role Ideologies", in *Gender, Class and Education*. The Farmer Press, pp.19-38
- 15) Stanley. J. 1986, "Sex and the Quiet Schoolgirl" in B. J. S. E. Vol.7, No.3, pp.275-286
- 16) 本調査によれば, 生徒たちは自ら「勉強グループ」「ヤンキーグループ」「オタッキーグループ」「一般グループ」に差異化していた。これに関しては稿を改めて述べる。
宮崎あゆみ 1993, 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス—女子高におけるエスノグラフィ—をもとに—」『教育社会学研究』第52集, 東洋館出版社
- 17) 女子高に来て実際変わったという生徒が少なくないことも注目される。(アンケート42.9%, インタビューで話題がのぼったのが8グループ)
- 18) コンパが他の主に男子校のグループと行われるのに対し, 紹介は一組の男女がもう一組の男女を引き合わせることを指す。